

のと思う。これと同じ例が昭31年11月12日水野行光氏の場合にも考えられる。

第2・1図の③：昭和33年2月26日17時頃、御殿場口7合目小屋前で、富士山測候所員長田輝雄氏が滑落死した。この日は前例と同じように優勢な低気圧が日本海北部を東進して前線が14時頃通過し、西の強風が吹き、強風突風帯が御殿場口にあったための事故と思う。

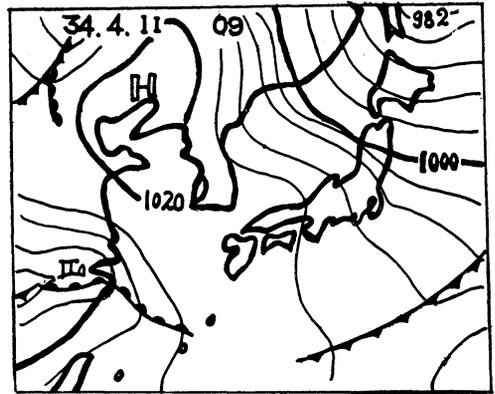
第2・2図と第3図は昭和34年4月11日～13日の間の、山頂の気象状況と気圧配置である。この時、丁度山頂測候所の荷上日に当り、11日午前4時太郎坊を出発した強力は35～45m/s ぐらいの強風下で終日行動し、無事初回の荷上を完了した。これは御殿場登山口が北西風の際、弱風域になるためと思う。また地形のC関係で強風帯が頂上近くで弱められることにもよるけれども翌日7.8合より荷上するために出発した強力は、山頂の風速が25～35m/s ぐらいであるにもかかわらず、始終強風と悪天になやまされ、ついに荷物を8合上岩尾根陰に置いて、から身でかろうじて逃げ帰ってきた。翌13日早朝より、少し地吹雪は残っていたが、天気も回復し風速も15～25m/s になったので出発したが風向が西であったため、前日のように難行し、荷物を持参することが出来ず引返した。同じ日15時頃風速は25～30m/s とかえって増加したが、風向が北西に変ったため出発し16時50分頃、無事荷上を完了した。

4. 結 語

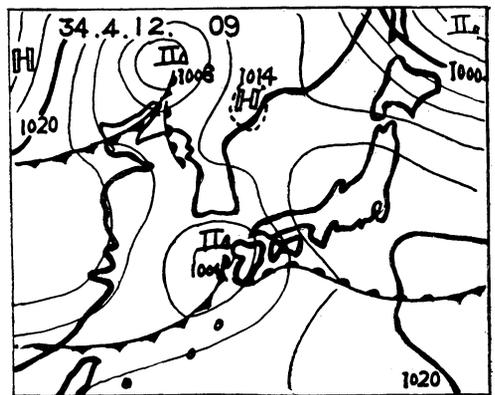
上述のほんの数例からも推察できるように独立孤峰、円錐形の富士山は、風速、風の質はもちろんだが、風向が登山ルートにおよぼす影響が極めて大きいことが判る。

我々が実際に登頂するとき山頂付近の風向、風速はラジオの漁業気象で知ることが可能であるが、山頂付近の雪煙の様子、頂近くの雲の動き、登頂者近くの風などからも、ほぼその日の風向、風速など判定できる。また上層の気圧の谷のモデルからも、およその山頂の風速、風向なども知ることができる。

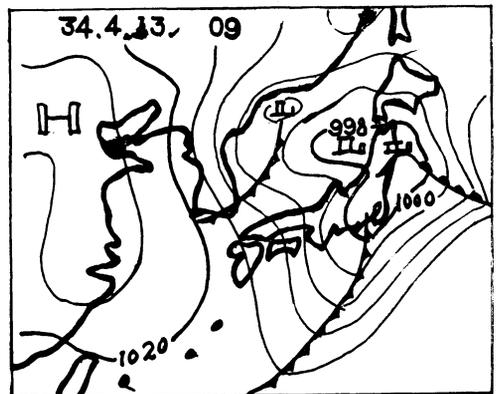
終りに種々ご教示をいただいた藤村所長、ならびに諸先輩に対して厚くお礼申し上げます。



第3・1図



第3・2図



第3・3図

7月例会延期のお知らせ

1. 低気圧を主題とする例会は8月24日(金)に開かれる予定です。講演希望者は6月30日までに気象研究所松本または気象庁予報課石原あてお申し込み下さい。

2. 高層気象を主題とする例会は9月27日(木)に開かれます。講演希望者は7月31日までに気象庁高層課大井あてお申し込み下さい。

昭和37年春季大会講演予稿集希望者は代金を添えて学会事務局へお申し込み下さい。定価150円 送料50円